第８回　第１分科会会議録（概要）		場　所	新宿区役所第一分庁舎 ７階研修室
日　時	平成 17 年 10 月 20 日（木） 午後 2 時 00 分～午後 4 時 00 分	記録者	【学生補助員】 古谷聡子　守田哲
		責任者	区事務局（菊地、並木）

会議出席者：２６名
（区民委員：２２名　学識委員：２名　区職員：２名）

■配布資料
① 次第
② 各グループ発表資料
・「青少年グループ」資料
・「親教育グループ」資料
・「子育てのための環境グループ」・・・提案プロジェクト
「ｕ－Ｊapan 政策」概要
まちの縁側だより（抜粋）
③ グループ発表に対する意見・提案カード（青少年・親教育・環境）

■進行内容
１　本日の進め方
２　各グループ発表と討議
① 青少年グループの発表と討議
② 親教育グループの発表と討議
③ 子育てのための環境グループの発表と討議
３　学識委員からのコメント
４　事務連絡

■会議内容
【発言者】●：区民委員、◎：学識委員、〇：区職員
１．本日の進め方
〇：（並木）
みなさんこんにちは。今日も宜しくお願い致します。今日はグループ発表です。司会は持ち回りでお願いします。終了後は交流会を予定していますので、皆さんどうぞご参加下さい。それでは時間がありませんので、早速グループ発表を始めます。時間配分は、グループ発表 15 分、討議 20 分、学識委員からのコメント 5 分といたします。発表時間の経過に際してベルを鳴らしますので参考にしてください。

２：グループ発表・質疑

①青少年グループ

●：司会　（乳幼児グループ　小原）

それでは、青少年グループの発表を始めて下さい。

発表概要

●:発表者（青少年グループ　陣出）

現状 ― 青少年を取り巻く背景

青少年を考えるうえでの範囲として、16 歳から 20 歳までの年齢を対象としました。多くの普通に生活している若者であっても、青少年の環境は情報過多で、人生における様々な選択が困難になっています。携帯電話やインターネットなどを背景として人間関係が急速に拡大する反面、犯罪の世界も近くなっています。こうしたことを背景として、四点を挙げました。第一に夢や目標を持てずにいる。第二に放課後の居場所がない。第三にコミュニケーションが不足している。第四に性犯罪や薬物犯罪の被害などが常態化している。

社会問題

こうした背景を持つ青少年達は、やりたいことが見つからず、自分を見失っています。その結果、ニートが急増し、様々なことに無関心な大人の存在も問題の増幅に一役買っています。投票率の低さも問題のひとつです。

新宿区の現状

中学生までは区立の学校にいく子供たちも、高校への進学と同時に他の地域に通ってしまうことで、高校・大学と地域の連携が非常に少ない。また、区の次世代支援育成計画でも、青少年への施策がほとんどない現状です。区民会議は早稲田大学との連携を積極的に行っていますが、まだまだ少ない状況です。

青少年の問題をどう捉えるか

青少年の問題を青少年という人生のステージだけで捉えるのは視野が狭いと考えました。青少年の問題は、ライフサイクルを総合的に見た上でどう位置づけるかという事を考えるべきです。それを前提とした上で、問題の原因を探り一貫性のある施策を議論すべきです。

青少年とは誰か？

青少年とは、満 16～20 歳の大人になる一歩手前の『市民予備軍』です。社会的責任を自ら自覚し、選択、決断し、行動できる市民。こうした自律した市民同士がパート

ナーシップを結び、持続可能な調和の取れたネットワーク社会を構築するのが市民社会てす。青少年は、こうした社会を構成する予備軍です。その準備期間を如何に整備するかが私たちの問題意識です。

新宿区で実践する際の留意点

　都レベルのトップダウンと区レベルのボトムアップの連動が重要です。それぞれの主体が出来る事というのを認識する必要があります。まずは地域でできること、広域行政でできることをそれぞれ認識する必要があります。また、全国でも有名な自治体である新宿区からならば、全国への波及効果も大きいと考えます。新宿区で成功すれば、モデルケースを確立することができます。それに習って他の地域も様々なアイデアを考案すれば良いと考えました。

●：（青少年グループ　山田）

改善策①＝ジュニア市民会議の目的

　ジュニア市民会議を提案します。ジュニア市民会議では、社会の問題の解決策を自ら考え実践する機会を提供します。その中で様々な体験を通じた自己発見や成長、チームワークの体験、コミュニケーション力の向上。社会の一員としての責任を自覚してもらう。

ジュニア市民会議の実行プロセス

　区が区民に対して門戸を開くというコンセプトが重要です。青少年にアイデアの採択や施策の委託を通じて、区は渉外関係や広報関係等の後方支援を行う。実行委員会づくりでは区の職員や区民会議のようなプロのアドバイザーを招聘します。広報支援では、募集のノウハウや会議、事業報告のツールの提供。また、区からの補助金、会場提供をします。重要なのは、市民の主体性と責任意識を支援することだと考えます。

ジュニア市民会議の具体策

- 青少年の居場所づくり、廃校予定地の活用
- 青少年向けの犯罪防止キャンペーン
- 新宿オール・ユース・イベント
- まちづくりの提言
- ジュニア・オンブズマン　など。

改善策②＝世代間交流

　青少年の年代を中心に前後の世代同志が協力し、つながりを強めながら成長しあう。大分年の離れた人間だと圧迫感があり距離感が難しいところがある。しかし、少し上

の年代の人間だったらホンネを話せます。例えば、教職志望の大学生による学習支援や、カウンセリング専攻の大学生による新宿かけこみ寺のような相談場所をつくると非常に有益だと考えます。

③改善策＝市民・学校・行政・企業の連携。

区が青少年の施策を実行する際、単独の企画だけではなくて、横のつながりを活かすという事が重要です。青少年の能力開発の機会を提供する。新宿ウォールアートや高校評議会、高校の開放などです。

質疑応答

●：青少年の年齢なのですが、20 歳未満ということでよろしいですか。20 歳となると社会的な身分が全く違ってきますので、伺います。

●：青少年グループ

そうです。20 歳未満です。

●：新宿区の住民構成は調べたのでしょうか。

●：青少年グループ

私たちが対象としている人は基本的に区内の人。私たちが調べた結果、区外の人もかなりいるということが判明しました。しかし、私たちが対象とする青少年は全てとしています。住民票のあるなしではなく、新宿区に住んでいる人間として新宿区を良くしていこうという意識が大切な訳で、異なる人間と交流することで何かが生まれるという相乗効果もあると思います。

●：　ジュニア市民会議はいいと思います。だが、一般的に活動を広げる場合、悶々としている青少年を引き入れる有効策はあるのでしょうか。我々も考えているのですが、なかなか有効な手段がないのが現状です。

●：青少年グループ

多角的なアプローチが必要だと思います。それは区でないとできません。全体として魅力的なものをつくりたいと考えています。最初のとっかかりが重要だと思います。方法としては、何かのイベントを企画して、特定の世代をターゲットに絞り、ひとつの母体を育てて、活動の裾野を広げる必要があります。つくるためのステップ、段階を踏むことが重要だと思います。それは、グループで見学をした「ゆう杉並」が示唆しています。ハコを用意するだけでは意味がありません。主体性を持ってもらうことが重要です。

加えて、ＰＲを高校に依頼するのも有効です。携帯電話のメーリングリストやメールマガジンを使ってＰＲするのも策のひとつです。ブログも有効だと考えます。若い人間には新しいもので勝負することが必要です。

●：新宿区の教育機関の実情として、進学校が多いという特殊事情があります。進学校

に通学している区外からの人間をどうやってジュニア市民会議に定着させるのか。そういうことを考えないと実現しないと思います。

●：青少年グループ

　そもそも、固定的に定着させる必要はありません。流動性が高いのは当たり前だと思います。私たちが提供する場、それ自体に定着性は必要ですが、参加者にとっては、これを人生のステップにしてもらえればよい。ここから巣立ってもらえればよいと考えています。ライフサイクルの認識といった広い視野が必要です。駆け込み寺、教職志望の大学生に協力してもらうという方法からも定着の可能性があります。自分たちの故郷としての新宿区をつくる。アイデンティティの醸成が必要です。

●：　青少年が夢や目的をもてないという認識を述べていますが、その原因は何んでしょうか。地域社会全体が多様な目標を掲げる事が重要ではないのか。若者が学校以外の友達づくりができる工夫をすべきだと思います。

●：青少年グループ

　夢や目標は自分たちで見つけて欲しいという事で、ジュニア市民会議を立ち上げました。区民会議がいいお手本だと思います。同じような目標を持った人たちが、分科会のような形で集まって触発しあって欲しいと考えます。

●：ジュニア市民会議を立ち上げるにあたって、その素地は地域の中にあるのでしょうか。既存のボランティア活動の現状を調査したのでしょうか。

●：青少年グループ

　調べたが、情報がなかったのでいくつかの施設の見学に行きました。榎町児童センターや「ゆう杉並」です。その他にも、社会福祉協議会の夏休み体験ボランティアといった活動があります。こうした活動は学校にもクラブ活動として学校にボランティア部があり結構活発です。

●：（意見として発言）　発表を聞いている限り、実態を見ていないように思えます。私たちのグループは小学校の校長に話を聞きました。実際には色々な高校があります。高校の校長に実際に会って話を聞かないと、実態は見えてこないのではないかと思います。

●：（意見として発言）私たちは地域で活動しています。活動の中核は、口コミです。新宿区に住んでいない人、定着していない人に対して行政は目配りしなければなりません。ジュニア市民会議は、色々な高校生を引き込むという意味で素晴らしいし、新宿区の中で彼ら自身が何らかのものを発信できれば成功だと思います。

●：（意見として発言）青少年の問題は、誘いかけに乗ってこないことだと思います。どうすれば広報活動に目を向けてくれるのか。先ほど、メールの話がありましたが、非常に有効な手段です。しかし、最終的には、人と話すという事が一番大切だと思います。

●：（意見として発言）ご苦労様です。なかなかこういう課題の解決は難しい。というのは、新宿区は非常に特殊な事情を抱えています。歌舞伎町などは区外の知らない人間ばかりが歩いています。ですから、手っ取り早いところから初めて、それを広げるべきだと思います。まずは、区に住んでいる青少年のことを考えるべきだと思います。そもそも区以外の青少年を対象に考えることができるのか。ジュニアというのは何歳から何歳なのか。どんな小さいことでも良いから始めるべきだと思います。

学識委員からのコメント

◎（杉山）：

私は青少年のことを考えると、わくわくします。

ところで、新宿区内の大学はいくつあるのでしょうか。そういうところと連携を取れるのでしょうか。具体的な仕掛けは、どこから攻めるのでしょうか。

私は大学が良いと思います。ジュニア会議は普通の学生は乗ってきません。サークル的なノリが必要だと思います。企画からどうぞというところから始めるべきだと思います。ボランティアをする人間はいるが、ボランティアをやりましょうと先に書いてしまうと、若者は来ません。杉並区の中学校のある先生は、まずはおもしろいというつかみが重要で、地域の皆がおもしろいということで見に来るような授業をしておられます。ボランティアはそれからの話だと思います。

一方で、若者に「どうやって労働意欲や責任意識を醸成させるか。」という事にも重点的に着目したいと考えます。区民にするか、区民以外の人にするかという点に関しては、区民の人には住みよい町を、区民以外の人には新宿がいかに楽しい街かということに留意すれば良いと思います。

② 親教育グループ

●：司会　（小中学生グループ　柳原）

それでは、青少年グループの発表を始めて下さい。

発表概要

●：発表者（親教育グループ　柏木・上野・沖）

新宿区の親の現状

そもそも、親という対象をどう捉えるかが難点です。人は幸福になるために生まれてきたという思想を最近の親は欠如している。親は子供を幸福にする義務がある。子は親の背中を見て育つし、社会は子供の成長を歓迎する義務がある。子供の問題は親の問題ですし、問題の解決方法を次の親に伝承する作業が必要だと考えます。

しかし、親の世間体を気にする意識がそれを阻んでいます。子育てが『孤育て』になってしまっています。親もカウンセリングを受ける必要がある。様々な児童虐待な

どの問題を見ていると、親の器が狭いと感じます。子どもの話を受容することが出来ない。子どもに対して嫌悪感を抱いてしまう。我慢ができない。自分の悩みを話す事に対してプライドが邪魔をしていると考えます。

問題点

問題点としましては、以下の４を挙げました。

- 親が子どもの人格を認めない
- 親が人の話を聞かない
- 親が子ども的である
- 近隣とのつながりが薄い

課題として

子どもの人権を守る親が必要です。子どもの権利条約から引用すると、「①生きる権利　②育つ権利　③守られる権利　④参加する権利」が挙げられます。これを参考にして私たちは親教育というのを考えてみました。

私たちは近隣デビューを切り口に考えてみました。近隣デビューと一言に言っても引っ込み思案な親はなかなか出てきません。親の誘いかけが難しいと感じます。「隣りの奥さん元気がないけど大丈夫なの」という積極的な問いかけをして欲しいと思います。「おせっかい大作戦」のノリが必要です。プラスの声かけをすべきだと考えます。相手からの返事が返ってくる。おせっかいのすすめを実践したいと思います。世間で子どもの凶悪犯罪などが起こっているが、子どもと一緒に親もカウンセリングを受けるべきです。実体験として、周りからあれこれ言われると心を閉ざしてしまう親も多いと思います。

参加型勉強会について

私たちは、参加型勉強会を提案します。「孤育て」ではなく、つながりのある子育てをしたいと思います。親が力をつけるような「親になったらまず、こうしてみたら？」というコンセプトの勉強会を地域の中で開催したいと考えています。これにより、低年齢層の保護者の段階から、早期に地域教育力を育てる環境をつくることができます。また、地域ごとに、保護者に対する勉強会を開催・意見交換の場をつくることで、横の連携を作りたいと考えます。横の連携の中で連帯感や、情報交換などが行われ、親の成長が促されるはずです。

内容として

ただの勉強会では誰も来ないので、他の親子と楽しい体験を共有できるような活動を考えています。料理教室や、遊びコーナー、プレーパークなどです。情報提供としては、ペーパー大作戦を考えています。このパンフレット若しくはリーフレットは、

常識集みたいなもので、簡素で良いから子育てや家庭生活に役に立つ情報を載せて定期的に配ります。すると、母親たちは『あっ、なかなか便利だな』と関心をそそられると考えました。

福澤諭吉の言葉から

　グループ発表の最後として、福沢諭吉の言葉を紹介します。子にとっては親が世界の全てで、小学校から中学校は親と社会が半々です。それまでに親が全てを決めてしまう。性格は親に依存しています。小学生の暴力行為が増えているのも、そうした認識が社会に根付いていないからです。結局のところ、親は永久に親なのですから、そうした責任感を持ってほしいと考えます。

質疑応答

●：　「おせっかい大作戦」、「ペーパー大作戦」とありますが、大変すばらしいものだと思いました。こうしたものをデータベースにして、インターネットで発信したらどうでしょうか。今の時代は、親戚が身近に居るわけでもないし、近隣の人に聞くことも躊躇っている母親が多い。そこでインターネットを活用すれば、若い母親も参加しやすくなるのではないでしょうか。

●：親教育グループ

　非常に良いアイディアだと思います。ですが、データベースという形のものとなると、なかなかつくるコストの面で難しい点があります。そうしたところは、区として、協力していただければありがたいと思います。

●：　ペーパー大作戦について、若い人間ほどマニュアルに頼る傾向がありますが、それこそ問題ではないのでしょうか。真面目な母親はそうでなければならないという強迫観念があり、マニュアル依存症、恐怖症になっています。要するに、判断基準を持たない親が多いことが問題なのです。基本は対人で解決すべきと考えます。そういった中で自分なりの判断基準ができてくると考えます。するとマニュアルに頼る必要もなくなるのではないかと思います。

　しかし、だからといって、マニュアルを全否定する必要もありません。マニュアルを作る過程で親が参加すればそのマニュアルは、単なるマニュアルではなくなると考えます。

●：親教育グループ

　それはごもっともです。話すという事は重要です。人によって頭の硬軟があるので、それを考慮して柔軟に手段を変えていきたいと思っています。

●：　私事で申し訳ないですが、息子の嫁はマニュアルに忠実です。ミルクの作り方ひとつとってもそうです。最近の親は、マニュアルに忠実だとか、世間体やプライドを気にするとか、自分の頭で考えて行動するというパターンが身に付いていないように思えますが、その点に関してはどのように考えますか。

●：親教育グループ

　世間体に関しては、昔は、うちはこの子とは付き合えないというのもありましたが、今はそれほどでもないように感じます。世間体というのも徐々に姿を消しているのではないでしょうか。また、おせっかいの件については、集まる人と集まってこない人がいる。やはり、最初のきっかけづくりが重要だと考えます。

●：　新宿区には、地区青少年育成委員会があります。区の予算で補助金も出ています。こうした組織を活用することもひとつだと思います。こうした既存の制度をもっと活用したらどうでしょうか。また、シングルマザー、シングルファザーといった一人親が急増していますが、どう対処するのか。小学校３年生程度までは、子どもを預ける場所があるので、親が働きに出ても対処できるだろうが、それ以上の年齢になるととても難しい。どうすればよいのか。国がつくるかもしれないが、国としては個人の自宅で子どもを預かるといった施策を考えているようです。こうした社会状況をどう思いますか。

●：親教育グループ

　そういった状況は深刻な問題だと思います。そもそも、親が子どものことを把握できていません。子供を別の場に出した時に子供が普段親には見せない別の顔を見せます。これは、親が子どもの行動を制限しすぎていることの裏返しだと思います。付け加えますと、父親の意識が変わると家庭は劇的に変わります。父親と食事を一緒にとるようにするだけで随分と違います。

●：　ホームページには第一次情報を載せておけばよいのではないでしょうか。例えば、駆け込み寺の情報だけを載せておくとか、マニュアルの中身まで踏み込まなくてよいのではないでしょうか。参加のきっかけの情報を載せておくだけで十分と思います。

●：親教育グループ

（意見として発言）若い親たちのプライドの話もありましたが、若い親は自分自身を持っていません。ブランド志向で、ひとのまねばかりをしたがって、非常に軽薄です。もっと自分自身の価値観だとか考え方を充実させて欲しいと考えます。

学識委員からのコメント

◎　（汐見）：

　だいぶグループのまとめも進んできたなという印象を持ちました。できれば次回のグループ討議で、質疑で出されたような課題にチャレンジしていただければ結構だと思いました。聞いていて思ったのですが、親教育というネーミングを再考すべきかもしれません。教育する側と教育される側の論理を考えるべきだと思います。上下関係の感じがします。親としては、教育されるという言葉に反発を覚える人間もいるだろうし、そこは根本的な問題なのでしっかりと議論したいと思います。親として育って

欲しいというのは共通しているが、教育してあげようという考え方だとアレルギー反応が起こります。「親としての育ち支援」とかのネーミングのほうが良いでしょう。

しかし、もっと現実の部分をみると、親は子供を育てるだけではなく、自分が生きていくのにすら困難な状況です。両親がいる家庭でも子育ては大問題なのに、統計によると、離婚した人間の平均年収は 230 万円とあります。新宿区の中でどうやって生きていくのでしょうか。そもそも自分の身を立てることもできない。こうした現状を踏まえると、一人親家庭が毎日インターネット見ることは幻想といっても過言ではありません。子育相談のできる窓口にも行こうとしない。こうした自分からは解決の糸口を探そうとしない家庭には、どうやって対処するのでしょうか。こうした課題が、どこのグループでもぶつかると思います。こうした中で、新宿区の基本構想・基本計画をつくるうえで、新しい一歩を踏み出そうじゃないかとチャレンジしなければならないこのグループのテーマだと考えます。

例えばということで、現在、私はあるところで、シルバー人材センターのパンフレットを作る過程で他国の資料などを参考にしていますが、カナダの事例には非常に興味深いものがあります。

子育ての過程で、最初の数ヶ月、十ヶ月というのは非常に大変です。カナダの場合、登録を事前にしておくと、それぞれの家庭に毎日、定年をむかえた人が手伝いに行きます。買い物から、寂しかった時の話し相手などサービスは多岐に渡っています。そうしたスタッフはＮＰＯが全て派遣しており、そのサービスによってとても子育てが楽になり助かったということを、実際に利用したアグネス・チャンさんが言っていました。

カナダの先例から学べることは、世代間の助け合いが必要だということです。新宿区のような都会は難しいかもしれませんが、本人が登録しておけば、毎日、毎週、相談相手になってあげるシステムを確立できます。簡単なアドバイスでもいいから話し相手になってあげることが必要なのです。自分から積極的に子育てを学びにいかずとも、上手に学びの場を提供してあげることが重要と考えます。「派遣型」「大きなお世話型」の支援から子育ての学びにつながる施策を一歩でも進めることができないだろうか。全部の地域でこうした施策を始めるのは、区としても無理でしょう。ですから、一部の地域ででも、こうした取り組みが始まり、地域で大変喜ばれるようになれば、少しずつ広がっていくことが期待できます。

また、カナダのシアトルでは協会が、結婚する前から「プレマリッジ」と言って、まだ結婚していないカップルに対して、結婚し、夫婦生活を円満に過ごしているカップルが色々なアドバイスや結婚生活のシミュレーションをしています。また離婚する際の対処方法といった、リアリティや創造性があるサポートが行われています。

時代の変化と親の変化がどう関連付けられるかという事を比喩で言うと、昔は子どもが家庭という厩舎から放牧されて育ちました。しかし、現代は放牧されていなかった世代が大人になっており、その子どもたちは厩舎の中で親に見られて育っています。親が

子どもに過剰な期待をかけ、親が子どもの裁判官になっている。親の善悪といった価値観が、二分法的な世界として、まかり通っています。そもそも自分で考えるクセがついていない。そういった意味で、先の議論であったようにマニュアルを全て取っ払うのも乱暴ですし、逆に、何でもかんでもマニュアル化するのも問題があります。ですから、さきほど意見として出されたように、第一次情報をまずは提供して自分の頭で考えてもらうというのは非常に重要だし、留意する必要があります。

③「子育てのための環境グループ」

●：司会（地域グループ　高山）

それでは本日の最後のグループの方にお願いします。

子育てのための環境グループの宇野委員、木村委員、宮内委員、森田委員の 4 人のグループによる「持続可能社会」に向けての「子育て・教育」及び地縁型コミュニティーの形成、伝統の伝承、ユビキタスネットワーク社会実現のためのプロジェクト」というタイトルでお願いします。

発表概要

●：司会（子育てのための環境グループ　宇野・森田）

お配りした資料の中に要旨が入っています。資料のグループ提案プロジェクトの１.課題から２.現状分析、３.目指すべき姿、までを宇野が説明し、４.問題抽出以降は森田委員が説明をします。また、資料の確認として、全体用の厚い資料のほかに両面で印刷してあります『まちの縁側だより(抜粋)』は補助資料となります。

まず私たちのグループのタイトルは「持続可能社会」に向けての「子育て・教育」及び、地縁型コミュニティー形成、伝統文化の伝承、ユビキタスネットワーク社会実現の為のプロジェクト」を目標にしています。

１.課題

次に課題として、人間が資源と環境を食いつぶしながら、滅亡のふちに確実に進んでいる現在、「持続可能社会」を未来社会ビジョンとして目指すしかなく、そのビジョンをいかに広めるか、「持続可能社会」実現のために貢献し、それを担う次世代をいかに育て、教育していくかがこの提案プロジェクトの課題であります。

２.現状分析

２番目の現状分析としは「伝統文化軽視、アイデンティティ、ビジョン欠落社会により多くの問題が発生しています。

① かつて目標としていた欧米並みの豊かな国に変わる社会的ビジョンがない。

② 社会や国にビジョンがないため、子どもたちがしらけている、前向きでない子どもが多い。

実体験（仲間との外遊び）が少なく生きる力が低下している、思考も浅い。

③ 戦後、アメリカへの同調と追従によって日本は経済繁栄を享受したが、その代償として精神や美意識、景観や倫理観など貴重なものを失った。
日本らしさがなく、アイデンティティが感じられない都市、街並みも美しくない。
④ アイデンティティを持たない日本人
日本の伝統文化、技術、精神、倫理観美意識を理解せず価値を認めない若者たちによって、それらが伝承されず消えていく。
⑤ 次世代に伝えたいものを持たない親や社会、迫力がなく惰性で行われていく教育や子育て。
⑥ 結婚、子づくりに意義を感じず、それらを人生の目的の一つに据えない人々が増加し、それが少子化を助長している。
⑦ 少子化でさらに貴重になった次世代の子どもたちを丁寧に育て、教育し、未来社会を担う人間を育てあげようとしない社会。
⑧ 人生の意義・目的を考えることすらしない人がほとんどである。
⑨ 社会が前向きでなく、皆なんとなく不安を抱いている。

３.目指すべき姿
３番目の目指すべき姿としては
① 人生の意義、意味を教える教育や子育てをしなければならない。
② 子どもを社会づくり、街づくりに参加させ、未来社会を担う自覚を持たせる。
③ 欧米追従の経済至上主義によって失われた、日本の伝統文化に基づく精神や美識、景観や倫理観をもう一度見直し、再評価する。それらを日本の社会や都市、個人のアイデンティティのバックボーンとして位置づける。
④ 伝統文化、技術、芸術等の優れたものを子どもたちに様々な局面で正確に体験させる。
⑤ 自然と共存する優れた日本の伝統文化、技術、思想を全世界に向けて発信し、世界が持続可能な社会になるよう貢献する。
⑥ 資源･環境を食いつぶしながら人類が滅亡の危機へ確実に進んでいることを真剣に受け止め、その社会も国も個人も、「持続可能な社会の実現」をビジョンとして目指さなければならない。
⑦ これを人々に共通認識として広めるとともに、何にもまして重要であるとして、価値観の変換を図らなければならない。
⑧ 人々のライフスタイル、産業構造、都市形態が環境に対し負荷のより少ないものに代わっていく必要がある。
⑨ 子育て教育の目標、方針を明確にする。
「持続可能社会の実現」という社会的ビジョンのため貢献できる人間、「持続可能社会」を目指し、担える人間をいかに育てるか。これは次世代育成支援計画の

テーマであり目標として掲げる。

⑩ 環境教育、自然体験教育、平和教育、エコロジー教育、リサイクル教育等実体験をともなった形で、家庭や学校のほか社会教育、さらに身近な地縁的地域においても行われる必要がある。

⑪ 子どもが地域の色々な世代の人と活動を通じて交流することにより、地域社会に対する

帰属意識が芽生え、同時に地域の伝統文化、歴史に触れ、よって伝承される。

⑫ 伝統文化、技術についての教育や伝承の意義、すなわち、自然と共存する優れた日本の伝統文化、技術、思想、制度を学ぶことはエコロジー技術、リサイクル技術等を学ぶことに劣らず、持続可能社会実現のために大いに役に立つ。

４. 問題抽出

問題抽出についてですが、目指すべき姿に向けて、克服すべき問題として以下の点が挙げられます。

① 「持続可能社会の実現」という社会的ビジョンが抽象的で捉えにくく人々にとって具体的イメージを描きにくい。

② 子どもたちは画一的で強力な管理社会にどっぷり浸っているため、自由な発想、思考を持ちにくく、価値観等が画一的なものになりがちである。

③ ここが一番重要なのですが、テレビやその他マスメディアを通じて、商業的な情報の影響を強く受けることにより、経済至上主義的価値観を持ちすぎている。それによって精神的豊かさ、伝統文化、持続可能社会などということにあまり関心を示さない。

④ 子どもたちがバーチャルリアリティーづけになり、読書体験や仲間との「外遊び」をしない。また、バーチャルリアリティーの刺激が、余りにも強いために現実の世界を退屈なものとしか捉えていない。よって現実社会や他の人間との関わりを嫌って、当然積極的に社会参加しない。

⑤ 地域社会と子どもの接点がなく、学校以外に「子どもの居場所」がない。

⑥ 「こどものための自然体験活動」やその他の活動を行っているが、必ずしも近隣で行われておらず、子ども自身の自由意志や力だけで参加することができない。

⑦ 地域社会のコミュニケーションが自然な形で形成され、豊かに発展していく仕組みや場所が現在の地域社会にない。地域帰属意識が育たない。地域活動、行事等が盛んに行われていない。したがって、古いヨーロッパの町の「広場」のような、人々が集うことのできる自然にコミュニケーションが生まれる場所が、地域社会に是非とも必要である。

５. 解決策

こうしたことを受けて５つの解決策を挙げました。その要約として、人々の価値観を変えてより良い社会に変えていくために、狭い地縁的コミュニティの強化をしてい

くと同時に、インターネットを道具として人や組織を有機的につなぎ広めていこうという方法論です。子どもをその活動の主役に据えて、活動体験を通じて地域社会で教育したり、ひいてはｅ-ラーニング等で教育したりする。その成功例としてドイツのフライブルクという街があり、ここは環境都市宣言をしていて、子ども自身がまちづくりに参加しています。

現在、社会主義が崩壊し、資本主義も行き先真っ暗で、日本が目指すべきモデルがどこにもない。しかし、考えてみると高い文化水準を維持し、リサイクルのエコロジー都市であった江戸がある。

江戸はほとんど、太陽エネルギーしか使わず、高い文化を維持していた。資源をいかに有効に使っていた点で他に類をみない最適化された都市ではないか。そこからヒントを得て未来社会を切り拓くしかない。その方法論として国も進めている「ユビキタス（どこでも、何でも、誰でも利用可能な）ネット社会（※資料『「ｕ－Ｊapan 政策」概要』）があります。これは、国はあくまで目標としていますが、これを手段として持続可能社会へ一気に転換していきたいと思います。

５つの解決策としまして、

① 目指すべき「持続可能社会」の具体的イメージを掲げ、基本コンセプトをつくる。仮に「（仮称）新江戸環境国際都市」をつくることとします。そしてこれを新宿区の基本構想に盛り込めれば良いと考えています。

なぜ、ここで江戸かと言いますと、美しい景観や街並みを保存し、環境に対して低負荷型生活を送り、同時に低負荷型産業構造を構築していくためにそれを見本にするということです。江戸の「文化や都市」を再評価することによって具体的イメージをつかみやすく、以上のようなコンセプトで都市づくりを行っていくと、日本独自の雰囲気と日本の古来の景観が取り戻せ、国際的にもアピールでき、評価が上がるのではないでしょうか。

② 持続可能社会達成のための組織、仕組みづくりをつくる。その仕組みとして「新江戸環境国際都市づくり実行委員会」と名づけましたが、ごくごく近隣地域ごとに組織し、子どもから高齢者まで参加できる。イメージとしてはボーイスカウトに大人が加わったような組織です。

③ 私たちが一番気に入っているアイディアですが、近隣地域公園を整備、利用して「地域交流」と「地域づくり活動」の拠点をつくる。拠点としては、公園の中に「茶屋」をつくります。「茶屋」は江戸風のデザインで、中では日本茶、お団子等を販売します。運営は地域ごとの「新江戸環境国際都市づくり実行委員会」で行います。メリットとしては、何気なく「たまれる」場所となり、地域住民にコニュニケーションが生まれます。また、地域住民意識が高まり、地域行事等への参加も活発になり、ひいては地域の支え合いや災害時の助け合いも期待できます。

④ 日本の伝統文化、技術、芸能、、遊びを教える「塾」をつくることです。それに

よって子どもの「居場所」ができ、それを通して地域の教育力の向上が図れ、 日本人としてのアイデンティティが生まれるのではと考えています。

⑤ 「新江戸環境国際都市つくり」をコンピューター上でシュミレーションし、ユビキタスシームレスコミュニケーションプラットフォーム、つまり、どこでも、誰でも、いつでも、情報障壁のないネットワークを構築し、まちづくり活動のデータベースをつくるとともに、情報格差をなくし、次も大切なのですが、既成メディアによらないコミュニケーションの活性化を図るということです。

以下、６プロセスデザインについては時間もありませんので、以下は配布資料を参照にしてください。

質疑応答

●：精神訓話的には素晴らしいが、どの程度、新宿区という意識をもってやられたのでしょうか。具体性が無いと思います。ここは東京都ではなく、新宿区です。すべてやるとなると都レベルになるのではないでしょうか。

●：子育てのための環境グループ

全部実行することは、今は無理だと思っています。少なくとも、パイロット的な要素が大切で、それがだんだんと東京都全体に広がっていくと考えています。

特に新宿区には欠けているのは地縁的コミュニティがまったく無いということです。それをどうやって一般化するのか。インターネットやホームページは血が通っていません。両方向で、感情の部分を地縁で補い、様々な情報をインターネットやホームページで、情報を自分で選ぶ実験の場として新宿区が行ってみるということです。

●：インターネットの利用度はどれくらいあると想定されているのでしょうか。インターネットでの情報伝達機構は、利用者を限定してしまうと思います。

●：子育てのための環境グループ

それはその通りです。ユビキタス、つまりどこでも、誰でも、いつでも、情報障壁の無いことを実現するために、街づくりのメンバーにＩＤ、パスワードを配り、それを利用して地域の例えば子どもが小学校のパソコン等にそれらを入力するとウェブ上で自分の情報が表示され、消すとそれは何も無くなる。それは他の小学校や図書館に行っても同様のことが可能である。そういったツールがあるので、一般的なホームページを利用するのでなく、ここではユビキタスを使うということです。特に子どもはバーチャル的なことが好きなので、ツール、つまり手帳型のようなツールを配って利用していくということです。ですから、一般的なインターネットの使用率は関係ないと思っています。

●：子どもだけが対象ですか。親は簡単には学校に入れないのですが。

●：子育てのための環境グループ

中高年にも目的があれば会員になってＩＤ、パスワードを配って、道具として使えば誰もが使うのではないかと思います。

●：そうしますと、それを使うためにどこか別な場所へ行かなければならないのでしょうか。

●：子育てのための環境グループ

確かにそれはその通りです。

●：要するに新宿区を京都や小京都と言われるような古い建物があるような街にするということでしょうか。例えば新宿区のまちづくりのイメージを江戸風にするということなのでしょうか。そしてその象徴として各公園に茶屋があって、そこにおじちゃん、おばちゃんがいるから、小さい子どもが行っても彼らが子どもたちを見守ってくれ、なおかつ、江戸文化を継承するような芸能等を教えてくれるというイメージでしょうか。

それを考える人たちのコミュニケーションツールとしてユビキタスネットワークを使って情報交換をしながら、考える人たち、つまり委員の人たちがまちの人に伝えていくということで理解しているのですが、これで良いのでしょうか。

●：子育てのための環境グループ

まちのイメージは人によって好き嫌いがあると思います。我々が強調したいのは、江戸は現在と比べて人々が本当に生き生きとして、文化も発達し、かつ省エネルギーの街であった。しかし今は逆になってしまいました。資源や環境を食いつぶした時代を変えなくてはならない。しかし、都市としてどう「持続可能社会」をつくっていくか分からない。わずか 100 年前にこのような文化があった。大江戸博物館や深川博物館へ行き、江戸庶民の暮らしぶりをみると楽しそうに生活している。ここから学ぶことが一番ではないでしょうか。

アイデンティティが無い。個人で持てといっても難しい。したがってそれを、伝統をバックボーンとして補う。せめて公園だけでも、東京に伝統文化を表すものがあまりにも無さすぎるから、伝統的工法を教えてもらいながら住民参加でつくって、外国人が来ても喜んでもらえるような日本文化的なものにしたらどうかと考えました。

また、茶屋の存在はそこに団子やお茶があると滞在時間が長くなる、間がもちます。それによって自然に知り合いも増え、情報交換もでき、親との交流や子育ての補完もできます。イベント、お祭的な存在で良いのではと思っている。

補足をしますが、先日、戸山公園に行った時に、昔、三角山があったところにスポーツ施設ができていました。一時期、ホームレスがとても多かったが、今はだいぶ減っているという印象を受けました。そういう意味で良い方向に向かっているのではないかと感じています。

●：大きな構想の一部分になるのですが、資料ｐ１１「近隣公園のポケットパークを茶屋へ」というのは、乳幼児グループも地域グループと連携して「ゆったりーの」的ネットワークをつくるというものを提案したのですが、「ゆったりーの」を各地につく

っても意味がありません。各地域にあった「ゆったりーの」をつくるべきだと思います。江戸風とか、イタリア風とか、地域の独自色でつくるべきです。「ゆったりーの」は新宿区が公募したものですが、具体的に、この茶屋の実行委員は誰が募集するのでしょうか。区が先導してやるのでしょうか。住民が主導してやるのでしょうか。実際に運営する際のプロセスはどうするのでしょうか。ボランティアでまかなっていくという発想だと思いますが、リーダーやコーディネーターの労力や活動の補助金、運営費等の問題があると思います。補助と委託はまた違うものです。どういった仕組みで進めて行っていくかという提案があれば乳幼児、地域、環境と３つのグループでひとつの提案ができるのではないかと思いました。

●：子育てのための環境グループ

個人的な見解ですが、民間だけ、行政だけではできないと思います。協力関係が必要です。そのためにしなければならないことが多くありますので、ここで出たような問題点を十分考えたいと思います。

●：司会（高山　地域）

ありがとうございました。それでは時間もきましたので、汐見先生から講評をお願いします。なお、みなさんの前に各グループへの意見・提案カードがありますので、他に何かありましたらそこへお書きください。

学識委員からのコメント

◎：（汐見）

壮大な計画ですね。気持ちの良い思いをしながら聞いていました。

今の日本社会に欠けていることは、問題が起こると、それを追いかけて対応している姿が目立ちます。そんな中で国民が納得するような目標を掲げて、そのために国民に呼びかけて新しい国をつくっていこうという夢とか希望とかが見えない社会になっていると思います。それに対して、国が目指していく方向を出していこうじゃないか、またそのキーワードとして「サスティナブル･ソサエティ（持続可能な社会）」があります。例えば、日本の炭酸ガスを日本の森林で吸収する為には、日本が１５個いります。変な話ですが、発展途上国があるから今の日本がもっています。そのような危機的状況の中で、どうしたら良いのか、どういう知恵を出せばよいのか国民総ぐるみで考えなければならない時代に入っています。でも、それをやろうという動きが出てこないといけない。「よし、やろう！」と大人が燃えていないときに、大人が目標を持たなければ子どもたちも前を向こうとしません。つまり、現状の問題提起をすると、全体の社会に波及するし、トレードオフのセクションが出てきます。そういうときこそ、ビジョンや目標が重要になってきます。社会のリーダーが社会の方向付けをしなければならないと思っています。例えばフィンランドは学力世界１位になっていますが、これは国の「機会均等」、「不平等をなくす」というはっきりとしたスローガンによって、子どもたちへの教育がされて

いるからです。

私たちの国の社会作りの目標をどう考えるか。そういった意味で、持続可能な社会づくりという問題提起は重要です。そのひとつのモデルが江戸にあったのではないかというのが今回の提案です。江戸時代のエネルギー管理は素晴らしかった。江戸はその時代の世界で最も多い 100 万人を超える人口を有していたにもかかわらず、平均気温は現在の－４℃であった。江戸時代には「人間と自然がどう共存するか」という日本的スタイル、素晴らしい知恵があったが、明治以降はそれがなくなり、高度経済成長の時期に世界最大の公害国家になりました。例えば多摩ニュータウンができたときに、枝枯れが多かったそうです。栄養層の土壌を全て除いてしまったため、大地の肥沃さが完全に失われてしまった。つまり、現代人は豊かな自然を有効活用できなかったのです。昔の日本人が持っていた知恵を忘れてしまった。ここから、江戸の知恵に学ぼうという提案になっています。例えば江戸はコミュニティセンターの豊かな街でありました。銭湯もひとつのコミュニティになっていました。街のコミュニティセンターをどうつくるかが課題として提出されました。江戸は私たちが想像していた以上に優しい街だったという理由から現代の公園に茶屋をつくることで、江戸時代の人情を復活させるというのは非常に良いアイディアだと思います。江戸という物語を用意してくれたのは非常に重要です。可能性のある提案だなと思いました。

私たちがこのプランを提案したときにもっと大きなレベルで採用されていけばいいなと思いました。いろいろなスローガンもできそうです。

これをＮＰＯとして立ち上げて実施するのか、新宿区の取組みとして実施するのか、見通しと役割分担を考える必要があります。プランだけが提出されて、みなさん参加してくださいではもったいないものです。プロセスデザインの細かい部分まで出していただければ良いと思いました。

●：司会（高山　地域）

ありがとうございました。次の目標も出てきて大変良かったと思います。では、以上で「子育てのための環境グループ」の発表を終わりにします。

４：事務連絡

〇：（並木）

皆さんお疲れ様です。次回は乳幼児グループと小中学生グループの２グループの発表となります。次回の第１分科会の日程を確認します。

第９回

日時：１０月３１日（月）　１８時３０分から２０時３０分

場所：新宿区役所第一分庁舎　７階研修室

よろしくお願いします。